

# 「聖書をどう語るか」牧師は説教をどのように準備しているか

松戸小金原教会 2009 年度第一回教会勉強会

日本キリスト改革派松戸小金原教会 牧師 関口 康

## 伝道は教会のわざであり神のみわざである

今年度の教会勉強会のテーマ「聖書をどう語るか」を提案したのは私です。伝道は牧師一人の仕事ではなく、教会役員だけでなく、教会全体のわざであると私は信じています。これは責任放棄としてではなく、事柄の本質から申し上げることです。

そして、より深く本質的なことを言うなら、伝道とは神のみわざ (missio Dei) です。神がキリストにおいて人間を選び、かつ人間を用いて伝道のわざを行ってくださるのです。その際、人間はいわば神の道具です。しかし人間は神の操り人形ではありません。自分の意志があり、感情があり、自分の力で動きまわることができる体があります。その体には血が流れ、汗も涙も流れます。あまりにも・あまりにも人間的であり動物的とさえ言える存在が、神の栄光をあらわす道具として、伝道のために用いられるのです。

このことは避けがたい現実でもありますので、わたしたちは、否が応でも、神のみわざが進められるために世と人の前に引き出され、衆目の前に立たされます。本心からすれば人の前になど出たくない事情の只中にあるときも、ほとんどグロテスクなほど心が荒んでいるときも、体が疲れ果てているときも、日曜日は容赦なく襲いかかってきます。

しかし不思議なものです。日曜日はわたしたちに息を吹き返す機会をも与えてくれます。昨日までの追い詰められた気分や不調な体が、まるで遠い過去のように。どうしてこうなのかについての消息は、よく分からないし、説明できません。「聖霊のみわざ」であるとしか表現しようのないものがあります。しかしまた同時に思うことは、日曜日ごとに教会で再会を果たすわたしたち同士が「信仰・希望・愛」、そして「喜び」を共有しあっていることを確認できるときにこそ、心と体のリフレッシュも起こるといふ事情ではないだろうかということです。

## 牧師の説教準備はリズム運動である

日曜日ごとに説教壇に立つ者は体調管理が大切であるとしばしば語られます。もちろん全く同意できる面と、反論したくなる面とがあります。わたしたちの「日曜日ごと」は、まさに文字どおりです。狂いなくきっかり七日ごとです。これが世の終わりまで続きます。牧師の場合は引退の日まで（途方もなく）続きます。笑点の落語家たちはたいへんです。説教者である者も七日ごとに確実に体調を戻せるようにならなければ仕事になりません。

しかし、これは慣れることでもあります。実際問題として、牧師の場合、説教の準備はリズムカルなものです。ベルトコンベアになりきる必要さえあります。日曜日が近づくとほとんど勝手に体と心が日曜日の礼拝と説教の準備をりはじめるようなところもあります。

夏休みの宿題が残ったまま 8 月 31 日を迎える小中学生のように、緊張感が高まり、焦りも募り、なんとかしなければと、脳が危険信号を出し始めます。真面目な話、説教の準備ができていないまま日曜日を迎えてみんなの前で冷や汗を流す夢というのを何度か見ました。はっと目が覚めて慌てて現実の時計を見て、まだ間に合うと知って、ほっとする。この夢を見たのは一度ではありません。

逆に言えば、このリズムが崩れると非常に苦しみます。夏休みにたった一回の日曜日の説教を休ませていただいても、次の説教の準備に困るほどリズムが崩れてしまうことさえあります。

しかし、今年度の教会勉強会のテーマ「聖書をどう語るか」の趣旨は、教会の皆さんがどう語るかであって、牧師がどう語るかではありません。ですから、通常の場合、教会の皆さんが説教をリズムカルに準備し語るということはないわけですから、この点はあまり参考にならないことでしょう。

## 説教の普遍性と日常性

ベルトコンベアは言いすぎだったかもしれません。説教は、悪い意味での「機械的な」ものではありません。しかし、料理にたとえることは不可能ではないし、かなり近いものがあると感じます。人の手をかけて丁寧に作るものであるという意味で。そして、レシピに従う必要があるという意味で。自分自身のレシピをもつことはありえますが、砂糖と塩を間違えて入れて「自己流です」と言い張っても人前に出せるものにはなりません。「まず自分で食べてごらん下さい」と突き返されるだけです。

説教は密室内のひそひそ話であってはならず、だれでもその場に居合わせてよいという意味で普遍的なものでなければなりません。説教のレシピには、説教者によって異なる面と、最低限の一致がないかぎり聴き手の側に「これは説教である」と認識されえないゆえに共通していなければならない面とがあります。語り手である説教者自身が「これは説教である」と思いこんでいるだけでは足りないのです。聴き手によって「これは説教である」と認められて初めて、それは説教なのです。

しかし、料理の場合も、有り余る時間と十分な手をかけて作るためのレシピもあれば、手早く作るためのレシピもあります。今日ご紹介するのは後者です。

ただし、「手早く」の意味は、早ければよい(時間節約)ということではなく、日常的であるという意味です。カレーライスを 10 時間かけて作る人も、なかにはいます。美味しいかもしれませんが、かなり非日常的なものです。私の考える「説教」は、本質的に日常的なものです。それは毎日のご飯とみそ汁であり、トーストとコーヒーです。説教はそういうものではないという考えもありえますが、私の考えは違います。トーストを 10 時間かけて焼く人はいません。説教の準備だけのためにまるまる一週間机の前に座りこむ牧師はおそらく失格者です。多くの方は、その人を「牧師」とは認識しないでしょう。「おいしい説教」はできるかもしれませんが、「牧会をする人」(これを「牧師」と呼ぶ)ではないと判断するでしょう。牧師の説教は「学者の講義」ではないと言われなければならない理由は、このあたりにもあると私は考えています。

## 説教作成のためのレシピ

おそらく皆さんにとっても参考になるでありましょう「牧師( 学者)の説教( 講義)の準備」のためのレシピは、次のようなものです。

- 1、聖書をじっくり読むこと。分からないことについては「だいたい分かった」と確信できるようになるまで解説書を読むこと。ただし、その場合の「だいたい分かった」を、言葉の辞書的・歴史的な意味が「分かった」で済ませるのではなく、その聖書の個所とこのわたし、そしてこの教会との関係が「分かった」と言えるようになるまで考え抜くこと。
- 2、教会員ひとりひとりの姿を思い浮かべること。過去と現在の教会員の語った(または「語っている」)言葉を思い起こすこと。悩みや弱さを訴える人がいれば、できるかぎりその人の立場に寄り添って考えること。このわたしもまた悩みや弱さをもつ人間であることを自覚し、弱い人を裁かないと心に誓うこと。異なる意見や立場や態度の人、または対立関係にある人などが教会の中にいる場合でも、「その人の罪を赦しましたから、わたしの罪をもお赦しください」と(口先だけでなく)祈りつつ聖書と向き合う。けんか腰や当てこすりとは、相手にすぐばれる。
- 3、新聞やテレビやインターネットなどで、いまの世界に何が起きているかについての情報を知り、関心を寄せること。ただし、それは説教の中で直接言及するための情報収集(いわゆるネタ探し)であってはならず、あくまでも、聖書とこのわたしの関係、また聖書とこの教会との関係の消息をなるべく正確に把握するためにする。牧師の時事評論はしばしば退屈なものに終わる(ほとんどいつも結論が同じだから)、例話は絶対に禁止というものではないが、少ないに越したことはない。神は地上の何にも例えられない。当たらないたとえが多すぎて、かえって聖書の真理を歪めることになる。
- 4、自分自身の身边を整理すること(「あなたの部屋を片付けなさい」と今は言わないでください。それは別の話)。晴れやかでゆったりした気持ちのなかで神の恵みを思い起こすことができるように、たまった仕事を片づけ、心配なこと、気がかりなこと、困っていることを減らす(無くす)よう努力する。
- 5、聖書を読む前に「こうあるべき」「こうすべき」という思い込みをなるべく持たないようにする。自分の言いたいことをあらかじめ先に持っていて、それに見合う聖書の個所を探そうとすることもやめる。自分の判断や方向性に当てはまっていない人を自分のもとに引き寄せるために、聖書の言葉を利用または悪用して何事かを働くことは決してするまいと、自分に言い聞かせる。

(2009年3月15日)

# 「説教の聴き方について」

関口津矢子

## 1 聴き手

「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歡心を買おうとしているのか。もし今もなお人の歡心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。」(ガラテヤ 1:10)

- ・聴衆からの自由：「説教は、人間を理解することではなく、神を理解することが行われる場所である。すべての人間がいきさいの人間的なるものに背を向けて、神に答えることである」(トゥルナイゼン)

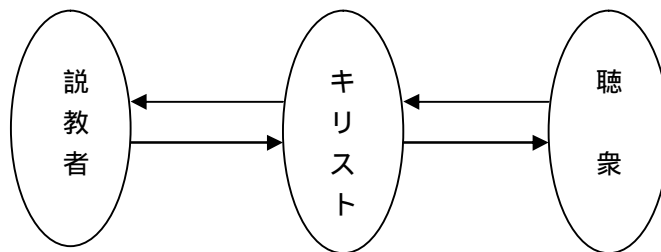
「神の言葉」として説教を聴くこと

- ・聴衆への配慮：「説教するということは、わたしが聞く者と共にその人の生活について語るということである。その体験、ものの見方、希望、幻滅、成功、失敗、使命、運命といったものについて語るのである」(ランゲ)

説教は教会(会衆)を造る

- ・第一の聴き手：「わたしはただひたすらわれらの主なる神にのみ説教をしよう」(ルター)  
聴き手は神のみ手の中にある

- ・第二のテキストとしての聴衆：「キリスト者はイエス・キリストを通じてのみ他者に至る」  
(ボンヘッファー)



## 2 対話

よい説教は対話と問いを促す。「わたしたちはどうしたらよいのでしょうか」(使徒 2:37)。説教者の人間としての限界と、聴衆の不完全な聞き方は対話によって補われる。

対話によって説教者と聴衆は交わり、相互に補い合う。

- ・期待
- ・讃美と祈り
- ・み言葉を生きる(派遣)